

2025 年 2 月の総評に代えて      高橋修宏

病院にいるような音楽の聞こえ方

吉富 快斗（埼玉県）

音が、反響するのだろうか。空間に吸い込まれるのだろうか。「病院にいるような」という直喩が、さまざまな想像をかきたてるものの、特定のイメージが手渡されることはない。不思議な一句だ。

仔熊座の柄杓の歪み余寒です

田崎森太（東京都）

確かに、「仔熊座の柄杓」は少し歪んでいる。ひとつの星座のディテールに注ぐ眼差しが、どこか偏執的でもあり、俳諧的で面白い。「余寒」の取り合わせも、見事。

山眠るうずまき管というところ

吉沢 美香（宮城県）

この「うずまき管」とは、人間の耳の中にある三半規管だろうか。微細な身体の部位が呼び出されることで、「山眠る」の印象が生々しさを伴って変容していくようだ。

ひとつずつ春の台詞を入れていく

僕のからだを一度壊して

香取小春（宮崎県）

季節の変化に対応する身体の変化のアレゴリーか。おそらく、われわれも（無意識であれ）、新しい季節に出会うときは、自らの何処かを空白にしなければ、受け容れることができないのかもしれない。

月冴えて仕舞う学芸員の椅子

azusa（京都府）

この一句が発する静謐な気配がチャーム。「学芸員」という措辞により、誰も居なくなった博物館（あるいは、美術館）の深夜の気配が立ち現れる。

星ひとつ見えない夜のベランダで

空のまぶたのなかをながめる

うたた（岡山県）

何より、「空のまぶた」という発見がポイント。その言葉を支点として、星の見えない闇夜でありながら、安らかな気配に包まれていくようだ。

純粋な心持つ母に育てられ

僕らはカモとして生きている

櫻川 佳子（愛媛県）

アイロニーが効いている。「純粋な心」と「カモ」が等号で結ばれてしまうことが狂っているのか、あるいは世界自体が狂っているのか。「純粋」という美しいはずの言葉が、ここでは宙吊りにされている。

花壇からはなれるきみの名札から

ふりがながなくなった春の日

雲理そら（大阪府）

何より、作中主体の眼差しの優しさに打たれる。もしや「きみ」は、幼い存在なのか。つい、よかったねと、「きみ」に声をかけたくなるような作品だ。

麒麟でも飼うつもりなの三月を  
こんな明るい吹き抜けにして

常田 瑛子（山口県）

少し大仰な「麒麟でも飼うつもりなの」という問いかけが、効いている。三月という季節のもつ、明るく伸びやかな空気感が、具象性のある景によって定着させられた。

鳥  
眠り  
風の冠  
花曇

加那屋こあ（東京都）

脚韻「り」を活かした多行表記の俳句か。「花曇」という季語のもつ、どこか白日夢のような茫洋とした気配が、表記の工夫を伴って演出されている。